



小竹人のお魚事情—その3 (漁の方法)—

富山県埋蔵文化財センター

縄文時代の人々の暮らしは、狩猟、漁撈、採集を中心に行われており、小竹貝塚では様々な狩りの道具がみつかりました。道具からは、漁撈（漁業）では現代に置き換えると大きく分けて刺突漁業、釣漁業、網漁業を行っていたことがわかります。

刺突漁業の道具は石製品では石鏃や尖頭器、狩猟で得たシカやイノシシの骨や牙・角を材料とする骨角器では刺突具がみつかりました。

小竹貝塚では石器（石鏃か小型の尖頭器）が刺さったイルカ肋骨がみつかりました。脇腹が水上に出るような状態で石器を刺したと推定されています。石器は先端が折れて骨の中に留まっており致命傷とはなりませんでしたが、その後の骨増殖がないためすぐに捕獲されたと推定されています。

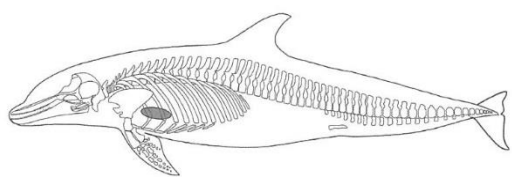
イルカなどの海棲哺乳類には石鏃、尖頭器などの石器を用いた狩猟方法が行われたようです。富山湾に臨む能登半島に所在する国指定史跡真脇遺跡（石川県鳳珠郡能登町）でも、小型イルカ肩甲骨に石器が刺さった状況やゴンドウクジラ類肩甲骨に刺突痕みられるなど似た状況が確認できます。真脇遺跡のイルカ漁は縄文時代の遺跡で骨が確認できるほかは近世の文献でも漁の記録が残っており、近世以降では集団による大掛かりな追い込み・網取り



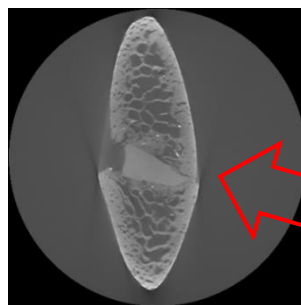
石鏃



刺突具（骨角製品）



石器の刺さった箇所（楕円形の部分）



X線写真
（白い箇所が石器）



石器の刺さった
イルカ肋骨（手前）

法が行われています。縄文時代もこのような方法で行われたのでしょうか。

釣漁業では狩猟で得た動物の骨を加工した釣針がみつきり、作りかけのものもみつっています。

網漁業の道具では編物の道具との説もありますが、石錘が664点みつっています。石錘は遺跡の近くで採集した河原石の円礫の両端を打ち欠いたもので、くぼみに網の一部を巻き付けて、おもりとして使用します。網の下部に付けて漁が行われていたと考えられます。網は現在はナイロンなどの化学繊維が用いられていますが、かつては網に麻や藁などの植物が使用されていました。小竹貝塚では網はみつっていませんが、植物を素材にしたと考えられます。

そのほか、発掘調査では水場での作業所の敷板として、丸木舟を加工して裏返したものがみつかりました。舟尾に一对の耳状の突起を付けた形状のものです。富山湾内や潟湖内での漁では舟が必須アイテムですが、小竹貝塚の人々も利用していたようです。

vol. 5でも紹介しました、集落の前面に広がる潟湖（旧放生津潟）を主な漁場として日々の暮らしを営み、想像の域を超えませんが、小竹貝塚の人々は狙う獲物によって異なる漁撈具を巧みに使い分けていたと考えられます。（高柳由紀子）



釣針・刺突具



石錘



足場に利用された丸木舟



丸木舟を裏返して設置した足場（赤丸内）